

オリーブの樹

第135号

2016年8月28日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 残暑お見舞い 重信房子
- P 3 夏の歌 重信房子
- P 4 独居より 重信房子
- P15 読んだ本 重信房子
- P18 オバマの広島訪問について 米澤鑑志
- P19 リッダ闘争44周年記念岡本公三表敬式典報告 PFLP

重信房子さんを支える会

重信 房子

幼の日吾子の写真を取り出して面会のあとの静かな余韻

タンポポの球形の綿毛願掛けてパレスチナの子らの決起に祈る

クローバーを摘みて小さな花冠オリーブに代えて戦士らに贈る

手術後の初ジョギング一歩ずつ紋白蝶を追いつつ走りぬ

オリオンに向かいて誓いし約束の果たせぬままに五月を迎えし

はたちにて殺されし沖縄物語パレスチナの子らの命重ねる

6・15未曾有の闘い遙かなり時代益々戦前に向かうか

野萱のかんぞう草群れ咲く小道独り往くルビコンの河渡りしあの日

麦秋の戦場の道駆け抜けるアラブの灼熱歪る猫房

夏の歌

残暑お見舞い申し上げます

暑い夏が続いていますが、お元気でしょうか。

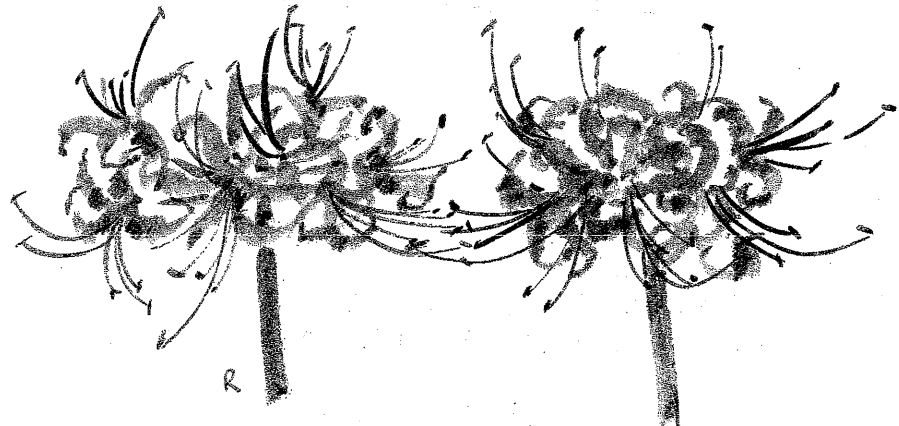
参議院選の結果に示された現実は厳しいものでしたが、戦略を見据えた新しい闘い方の始まりとしていきたいものです。

また、世界の各地が暴力化していますが、世界の暴力化の源流は、やはり今も続く米國ら有志連合に示される空爆をはじめとする武器と暴力にあります。

そしてまた、中東の暴力の中心に潜んでいるイスラエルの不当なパレスチナ占領問題です。まだまだ厳しい世界が続きます。占領、ことに占領地の入植活動への糾弾やBDS運動が広がり続けていくことに希望を重ねます。

私の方は、四月の大腸癌手術後も順調に回復し、元気に夏を乗り切ろうとしています。いつも皆様の励ましと支援に感謝しつつ、皆様のご健勝祈ります。

二〇一六年 八月盛夏



独居よい 5月20~8月11日

ISを空爆することとグローバル「テロ」は一つの合わせ鏡

重信 房子

5月2日 連休続きのような平日です。

今日、診察はありませんでした。朝、ベランダ運動。もう手術から四週間目に入るので、少しいいかな…と、ゆっくり百歩走ってみました。まだどこか違和感があり、あとは無理せずにウォーキング。ラジオ体操のジャンプもしてみました。少しずつ元に戻っていくようです。

新聞では5月1日、各地でメーデー。メーデーは昔ほどではないとしても健在です。そして、これまで対立していた全労連と全労協が別々の集会ながら、双方の幹部が初めて出席して挨拶したとのこと。戦争法案に反対をとうしたことで、共闘が育ったとのこと。安倍に「賃上げ要求」とか、お株を権力に奪われ、先んじられる力関係の中、「質」よりも「量」の共同戦線で、何としても改憲シフトを阻止してほしいと願っています。

5月3日 改憲不要55%、必要37%、9条改正反対68%と、毎年の憲法の日世論調査です。戦争法が可決されて以降、逆に憲法改憲を許さない風潮がこの世論調査に示されています。その良識で、何としても参院選の結果を生きたいものです。憲法を静かに読む憲法記念日です。

5月6日 連休の間の平日です。運動もベランダでウォーキング。

友人たちから手術の成功を、ホッとしたりと喜んでくださるお便り受け取って、私もみんなのお蔭と

感謝ばかりです。今日は房検査もあり、連休の合間の平日ですが、面会や受信などバタバタ忙しい一日になりました。5月、何かしたい1月です。

5月9日 今日の新聞には十亀弘史さん●二首が選ばれている朝日歌壇です。永田和宏さんと佐佐木幸綱さんの選に“獄中へ持ち行く本を買ひに来て分厚き本を選びおれぬ”又、高野公彦さん選で、“入獄を前に末期の眼めく空も川面も緑も美し”選者は「作者注に『迎賓館・横田』事件で28年の裁判の

結果『有罪』が確定し、4年7か月入獄します、とある」と記しています。十亀さんらは、地裁で一旦無罪になったのに、権力の意向を反映し差し戻されて、結局有罪をつくりあげられたものです。中核派に対する権力のやり口。十亀さんの歌はいつも明るい。健闘と健勝を祈ります。

診察。主治医から「もう明後日から普通食で良い」と言われました。生体検査報告時から、外科から主治医に管轄も戻り、CVポートの洗浄もしました。今日は滞っていた資料やお便りがたくさん交付されました。「5・30リッダ闘争44周年フォーラム」5月30日早稲田奉仕園内で、「対テロ」攻撃を国際主義の復権で跳ね返そう！をテーマに、廣瀬純氏（龍谷大教授）が「今問われる国際主義とは？」を報告講演するとのこと。岡本さんの支援の会「オリオンの会」の再活性化もテーマのようです。シオニズムに抗し闘い続けることは、グローバル時代の共通の闘いのテーマであると同時に、その夢をなすパレスチナ支援を国際主義の復権として焦点化してほしいと願ひ、連帯します。

「はなかみ通信」感謝。特集は前号に続いて「鶴見俊輔さんと私」。ほんとに親しい鶴見先生を師とする人々や生徒たちの多い「はなかみ通信」らしいです。手術の後のゆったりした気分で読むには最適な冊子です。ありがとうございます。

5月12日 今日は3月以来手術後初めてのグラウンド運動に出ました。建物を出ると五月の薫風がやわらかい花の香りを連れて身体を包みます。今がこの獄の庭に咲く春から夏への花盛りです。ツツジは終わりの花を残し、タンポポは球形の白い種を風に揺らしています。かわりにあちこちに可憐な庭石菖が紫の花をつけ、クローバーが芝生のところどころを白く染めて真盛りです。ピラカンサもコデマリのような白い花をつけ、見上げるとアカシアの花が風に舞い運動場への坂道を白く散り敷いています。桜の木は緑に変わり小さな赤い実が陽に光っています。姫女苑が背一杯に一斉に花を天に向け、足下には黄のカタバミやミミナ草、まだオオイヌノ

フグリも咲いています。空は真青。気持ちの良い五月。ゆっくりグラウンド一周走ってみました。100メーターちょっとですがムリせずに一周だけ。気持ち良い！あとは花を摘みながらゆっくりとウォーキング。中央棟の方にはみごとなバラが開いているのですがこちらで見るとはできません。もうすぐサツキが咲くでしょう。

5月15日 パレスチナ、ナクバの日。日本の新聞には記事がありません。沖縄が「本土復帰」した日でもあります。「本土復帰が幸せだった」と沖縄の人が言えない状態を今も継続させたままです。逆に益々戦争法、集団自衛の「反中国包囲」の中で沖縄の基地を固定化したままです。沖縄の人々の闘いに連帯し、パレスチナの占領地解放の闘いに連帯し、薄曇りの空に祈りました。

5月20日 「可視化法案成立へ」の記事。結局、司法攻撃は権力のやりやすい方向に強化されたようです。司法取引に、監禁の拡大。運用当初「通信業者立ち会い」や「本人通知を要件」としていた総務省のガイドライン改悪で、これが不要となって捜査当局はGPSが裁判所への令状だけで自由に位置情報が取得できるように去年既になっているとか。「新機種携帯は、順次捜査機関に本人通知することなく、位置情報取得に対応する」という記事が数日前にあっただけ。監視・管理社会は国権を恐ろしいほど肥大化させつつあります。

「オリーブの樹134号」を夕方受け取りました。感謝！花ニラの春でした。表紙を見て、なつかしく思い出しました。今号は、筍や土筆やなすなや、いっぱい懐かしい絵、ありがとう。竜子さん体調はどうですか？今号は丁度2月の検査から4月の手術まで、私の方は大腸の再生物語ですが、元気です。4月の短歌は手術前後の姿を詠みました。挿絵がありがたいです。

5月はリッダ闘争のこと、それにサイクス・ピコの密約百年の中東のことと、論文が重なって読みづらかったでしょうか。季刊になったので、論文を一つ入れようと思ったのです。外の人びとと交流し思いを伝えるものとして「政治的」文を求めて下さる方も居て、比較的その方向に記したりしています。質問やアドバイスを受けながら「オリーブの樹」をもっと興味深いものにしていきたいと思っています。

5月24日 G7 間近で、安倍首相、威信を示そうと警備は過剰、ヒロシマへのオバマ訪問での「主役」の一人としての振舞いなど、参院選を意識した演出が目立ちます。「政教分離」のはずの日本で、ジワジワと伊勢神宮が国家宗教のように、節目節目に登場しています。又G7の「難民問題に対応」して、どういうつもりか「来年から最大5年間で150人のシリア人留学生の受け入れ」を発表。「難民を難民として受け入れる」ことをせず、二桁も三桁も世界の受け入れ人数の基準とズレていること。日本の後進性を示すばかりです。「難民申請者」を、まずUNHCRが求めている「第三国定住」でも滞在をほとんど認めるべきではないのかと思います。

「ブチの大通り」ありがとうございます。読んでいたら、4月30日、人口13万人の大崎で「安保法制廃止を求める大崎大集会」で1,100人も老若男女が集まったとの報告。地方で反戦を粘り強く闘ってきた人々の力強さが伝わってきます。荒井まり子さんの、自分の育った故里での活動の姿が、身近なその大崎集会も伝えてあります。浴田さん出所にむけて元気な様子にも、ホッとしています。

5月28日 G7 が閉幕し、オバマ広島訪問の記事で新聞は埋め尽くされています。白抜き活字で「核なき世界へ『勇気』をオバマ大統領広島演説」と。「戦争と核なき世界の『勇気』語り空爆無人機指令は誰ぞ」と思わず一首。もちろんヒロシマに米大統領が行ったことは改めて「ヒロシマ」や「核」の問題「戦争」の問題をグローバルに焦点化させた意味で価値があります。中東から見える「オバマのヒロシマ」の姿は「それでは何故核を許し戦争を指揮するのか!？」というダブルスタンダードを問うでしょう。米国内政局を読みつつ、「誠意」と「レガシー」のオバマ流。ドローン殺人の記録を日々更新し続けているオバマ政権ですが……。

もう一人に一首「サミットもヒロシマもまた政局の具として得々我が首相」何とか安倍首相の国家主義の暴走を押しとどめたいと願うばかりです。

5月29日 朝、快晴の青空が起床前から広がっています。丸岡同志の命日。「成功を語る笑顔の大きな眼半ばで逝きし君の命日」「逝きし友夢に現われ危険知らず真夜に目覚めて獄窓に立つ」様々なこと、感謝と共に思い出します。思い出し笑いもいっぱいくれる友です。

5月30日 今日のはめずらしく雨の5・30です。
 乾季の中東では真青な空と、その青を映した地中海。草原は花盛りの五月です。リッジ闘争に向けて5月の中旬まで彼らがフォーメーションや訓練をしていたのは、ベカー高原でも北の方のパールベックからシリア国境地帯。五月は、山のかげんで霧がたちこめ、夏の花盛りを濡らしているところです。
 今は、反シリア政府軍のヌスラ戦線やヒズブッラーが戦場としているでしょう。すべての対立の歴史的原因であるサイクス・ピコからバルフォア宣言、イスラエルのパレスチナ占領をもっと本当に直視し、中東の問題を再編しぬく勢力（それは中東左派勢力ですが）の強化を願ってやみません。

5・30のこの日、闘いについて兄弟たちを丸さん共々思います。パレスチナは、世界の公正のメルクマールのままあります。
 霧深き硝煙のベカー決然と
 発ちて進撃テルアビブの道へ

6月1日 午後主治医診察。5月25日の採血検査の結果、異常なしと伝えて下さった。もうすぐ4月4日手術から2か月。健康です。
 Kさん「オリーブの樹」を読んで手術を知ったとお見舞いの方々の励まし、ありがとうございます。Kさんのお連れ合いと宮崎先生の命日が同じ日となりました。等しく例外なく人は定命を迎えるのですが、逝く人にとって死は生の延長であり、周りの人々にとっては新しくその人の生を刻む儀式のような気がします。
 自分史は講師に書き直されるので「願せしもう、きれいな文に毎回直されるのが嫌な思いになってき



ました」と。感性がきつとかけはなれている人ですから「きれい」に書くことよりも思ったことを自分の言葉でどんどん書く方が良いです。文章書くとき、想いを書こうとすると一つの文章が長くなり上り下り書けないことがあります。私の友人のプロの書き手が教えてくれたのですが「文章を短く切る」とそこから抜け出せて上手く書ける気がします。「きれい」よりも自分の書きたいことを続けて書いてみて下さい。

6月3日 快晴続きの八王子。もう友人たちは田植えですね。

友人からフェイスブックでリッジ闘争に関してチェックしてみたら、PFLP 情報局のサイトで、ガザのPFLP 国際部が制作した「英雄的リッジ空港作戦 5月31日」というドキュメンタリーが近日中に公開されると出ていたと知らせてくれました。当時を知らない人が作ったのか予告編を見たらミスがあったとのこと。見てみたいですね。作戦は現地時間5月30日夜10時過ぎだったと思いますが、5月31日になっているとのこと。日本時間では5月31日でしたが、若い人たちがアッバスの無能や、またまたの「フレンチ・イニシアティブ」の幻想を振り撒くのに、拒否の思いが強い分、リッジ闘争、武装闘争、国際主義の復権を願っているのでしょうか。

10代の少年少女が殺され続けています。5月27日チェックポイントで射殺された女の子の写りが痛ましい。

6月9日 「創」で、4・19シンポジウム「安田純平さん拘束事件と戦場取材について考える」を読んで、(第二部「安田純平さん救出のために何ができるのか」含めて)いろいろ考えの違いがあること、また、救出に向けた組織体がないことを知りました。政府に頼ると、ろくなことにならないので警戒する声もあります。でも何よりも日本政府は日本国民保護責任を負っているのです。まず、救援連絡センターなどが当事者、友人と弁護士を組織して、民間の「安田救援会」を立ち上げ、政府に対し怠慢を追求すべきでしょう。本当は、米国やその同盟国を使って外務省は必ず情報収集しているはず。まず弁護士らを仲介して、生きて安田さんを取り戻すために、火急に政府が民間の動きに協力すべきこと、そのための協議を行い、必要なら「身代金」も政府は準備すべきです。どの釈放された人も一定の身代金

を払っているからです。あらゆる力を「生きて救出」に注ぐことが何より必要なはず。このシンポジウムからもう2か月近いので、そういう組織ができたかもしれませんが、安田さんばかりか、今後の邦人被害者に対しても、政府の義務をきちんと実行させるためにも。

今日受け取った昨日の夕刊、酒井啓子さんの一文がいい。オバマのヒロシマ訪問は、アラブでどう記事になっているのかを述べた後、被爆国と中東「核攻撃で失う十数万人の命も、ドローンの攻撃で失う一つの命も、愛しい者を奪われた遺族の悲しみと嘆きに差はない」痛みに違いがあるかと問う。

6月10日 丁度受け取った資料に、久しぶりにネオコンの動向が出ていました。「トランプ支持」をめぐってネオコン内で分裂とか。

「アメリカ新世紀プロジェクト(PNAC)」の設立者の中心のロバート・ケーガンは、トランプが海外米軍基地不要論や軍事介入に消極的なのを非難して、ヒラリー・クリントン支持表明。ヒラリーはネオコンと元々近い。国務長官時代の彼女の右腕がケーガンの妻で、その後のウクライナの反ロシアクーデターを裏で演出し、駐ウクライナ米大使との電話が盗聴され、公になってバレット・ビクトリア・ヌーランド国務次官補で、もともとイスラエル防衛で意思統一しているヒラリー・クリントンです。

「トランプ支持」は、ブッシュ政権副大統領のディック・チェイニーと、ネタニヤフのパトロンのカジノ王ジェルドン・アデルソン。ネオコンは在米ユダヤ人学者を中心に、民主党の軍備増強反対路線に対抗して、70年台に作られてきたイスラエルロビーの中心的人脈です。ネオコンのマックス・ブートは「イスラエルを支持することはネオコンサバティブの最重要教義である」と常々主張しています。「ネオコンが右派に移った主な理由の一つは、彼らの持つイスラエルへの愛着ゆえだ」(政治学者ベンジャミン・ギンズバーグ) ネオコンと保守で競合する「旧保守」のラッセル・カークは「ネオコンを本当に動かすものは、イスラエルを守ることにある。これはあらゆることの背後にある」と断言していますが、98年、ネタニヤフの政権構想案を書いたり、そのとおりです。ネオコンもいつもの「双頭作戦」のイスラエルロビーのやり方で、ヒラリーにもトランプにもどちらに権力が移っても、重要な役割を果たす布石を打っています。

デジカメ歌人の一首「たっぷりと陽が満ちているタンボボの最後の一毛も飛ばす風吹け」芒種のお便り。雨期に入っていますが、名残の爽やかさを感じてください。青空にぽっかりと白い雲の写真と共に。もうそちらの水辺にカキツバタは咲いていますか？ 紫陽花もなつかしい。雨季のもまた良いところがあると思ひ込んで乗り越えたいです。

6月11日 今日は信原さんの命日です。風が口笛を吹くように桜木立を渡っています。ドクトーラの「ピラーディ・ピラーディ・ピラーディ♪」とパレスチナの解放勝利を歌う大きな清らかな声が響くような錯覚に、あれこれ思い出しつつ帯の挨拶。

そうだ、6月はまた、西浦クンの突然の癌治療の話聞いた6月でもあります。手元に5・30の集いの資料が昨日届きました。その中に岡本同志の5月の共同通信とのインタビュー記事のコピー「パレスチナに骨をうずめたい」「日本赤軍の岡本容疑者、72年乱射について、死者の多くがプエルトリコ人だったことに、『犠牲者には哀悼の意を表したい』と謝罪の言葉を口にした」と記者。「哀悼の意」は、PFLP含め、当初から日本赤軍、丸さんら含めて表明してきたものです。「謝罪」というと、「ちがいます」と言うでしょう。岡本インタビューでも「哀悼」と共に「武装闘争のためには人を殺すことも仕方なかった」と、当時のことを強調しているとのこと。「謝罪」の政治的意味が、イスラエル政府の占領正当化と一つにとられるので、「哀悼」として止めていた当時のことを思い返しつつ読みました。

5・30集会は『対テロ』攻撃を国際主義の復権で跳ね返そうと、国際主義・グローバル時代の在り方・闘いなどが話し合われたようです。岡本同志の笑顔に年輪の重なりを思い、また自らの、そしてかつて共に闘った者たちの年輪と闘いと生活に思いが至ります。一年ごとに刻まれる5・30ふりかえり、反省を教訓として前を向いて挑む一里塚ととらえて、更に志を實踐に！ そんな意気を感じつつ読んでいます。

6月16日 梅雨のため6月2日以降今日もグラウンド運動は中止です。スズランは一度も見られないまま終わり、今頃は紫陽花が咲いている筈ですが……。小雨の合間をぬって紋白蝶が野げしやクローバーへと飛び巡っています。

今日午後Tさんが送ってくれた(何か不明ですが)

「プリント一枚」が「矯正処遇上不許可」と告知を受けました。泉水さんの関連でしょうか。獄中者に関しては情報が、とくに信書などでは厳しく禁止されています。丁度「国踏つうしん」のパンフが届きました。一部勝訴判決本当によかった。ふうさんのレポートでは判決後の面会ののびのびした気持ちが伝わります。泉水さんと弁護士はじめ原告のみなさんの友情、粘り強い訴え、連帯に頭が下がります。ありがたいことです。更に「控訴審」ばかりか「刑の執行の順序変更」順変の「義務付け請求訴訟」をおこし、第一回口頭弁論は6月22日とのこと。どうか成功しますように。もしかしてTさんの「プリント一枚」とは突如として判決に対抗報復のように「文通禁止」がTさんに行われたことかもしれないと思ひ至ります。(前に4月頃の話だったと思ひます。)泉水さんTさん親しかった間柄なので(赤軍とか関係なく)酷いことです。

6月19日 見事な純白の白芍薬が2輪、目の前に開いています。独り占めするのはもったいない位!昨夜は就寝前に小望月が煌々、白い花びらがその後開きました。“しんしんと獄の病舎の夜に濡れて白芍薬は満ちて開きぬ”

6月20日 今日の新報一面に沖縄の県民大会の抗議の姿。海兵隊撤退を求め、県内移設によらない米軍普天間飛行場の閉鎖・撤去、遺族らへの謝罪や補償、日米地位協定の抜本的改定を求める県民決議を採択しています。土屋源太郎さん、砂川基地闘争を闘った総括の中で本土側の私たちが沖縄の基地撤去を含めて闘い抜けなかった結果、本土の犠牲を負わせるように沖縄基地の固定化に至らした、というように語っていたのをかみしめています。海兵隊も基地も撤退を! 沖縄は東アジアのセンタ



ーにある国際都市。琉球独立したらどんなに繁栄するだろうと思わずにはいられません。本土政府が沖縄の基地固定化という犠牲を望む限りアジアの60年代の冷戦構造を呼び込んでしまっています。

参院選も都知事選も野党とくに民進党の戦略不在は、また安倍延命を助けてしまいそうです。都知事選野党統一候補勝利から次の衆院選まで布陣を引くべきなのに……。

6月23日 梅雨じめりが続いています。あんなに美しかった白芍薬もドライフラワーのように枯れて茶に変色してしまい、廃棄してしまいました。茎に水が通っていたら、盛りの頂点で一瞬に散華する美しい潔い終わりをむかえる花なのですが。

今日の診察、CV ポートのフラッシュの時、体調を聴かれて、少し立ち眩みが続いていると話す、診察してくれました。ベッドに寝て血圧を2度測り、最後が118と58を確認して「そのまま今度は立って測りましょう」と、今度は立って測ると82と59の血圧でした。「寝た時と起き上がった立った計測値が20以上差があると、『起立性低血症』と診断されます。高いほうの数値で、36の差があります。今も立ち眩みしたのではありませんか? 薬よりも生活習慣で気を付けるのが良いと思います。倒れると危険なので、まず、起きたり立ったりをゆっくり動作すること、立ち眩みが来たらすぐしゃがむこと。脳に血液が届くのが遅れるために起こるものです。ヘモグロビンも正常で貧血ではないので注意してください」と診断して下さった。

冬は高血圧、夏は低血圧傾向の私。早くパッと起きたり立ったりする性質ですので、ゆっくりを心がけねば……。

和尚さん、送ってくださってありがとう。6月30日のフジTVの「アンビリバボー」という番組は、コードネーム「ZERO」という「反テロ」秘密捜査機関が、私を逮捕するのにどんな苦勞と活躍をしたか、という警察美化の物語ですってね。体制の好みそうな番組。

日本では政府批判は「犯罪」のようにネットでパッシングが誘導されているようですね。富士ロック・フェスも「反体制」の原点がいつの間にかSEALDsをめぐって「政治排除」。自治体もメディアも「非政治家」に逃げ、「中立」という体制擁護のサイクルに服するシステム。その音頭を官邸がとっている構造。警察国家化、国家主義者の中で参議

院選。今回は厳しい結果になりそう……。自民党官邸、マスコミ電通らの「非政治化」への誘導が、あんなに人々が反対を表明した戦争法を過去のものとして、フクシマも沖縄も貧困化もオリンピックとアベノミクスの「夢物語」に溶かし込もうとしているのですから。現実を立てば、現実を直視すれば、もっと野党も危機感をもっといいはずなのに。「民進党より自民党」という流れがつくられ、また実際民進党の頼りなさ。

「7・17三里塚闘争50年の集い」が開かれるのですね。主催は、三里塚芝山連合空港反対同盟で、加瀬勉さんの講演も予定されています。50年か……。66年から67年、68年、69年、70年当時のデモ、壮烈な公団公社包囲戦など浮かびます。三里塚闘争は、多くの犠牲の上に闘い続けてきた砦。今も第三滑走路建設画策の中で闘い続けています。三里塚が切り開いた地平、「闘う人々」「場」との全国的そして国際的闘争交流を、今後とも継続して下さい。

パレスチナ三里塚交流を、ペイルートでの三里塚連帯の集いを思い返しつつ連帯!(78年3月~4月のパレスチナ国際連帯絵画展ペイルートに参加・出展された戸村一作さん、画家で反対同盟委員長を囲んで行われていたのを思い出します。)

6月24日 EU 離脱派勝利のニュースが昼のスポーツニュースで「BBCが伝えた」と放送しました。旧い欧州の友人たちはどう考えているのでしょうか。当時は「遅かれ早かれEU崩壊」と言っていました。大国の意思と基準が押し付けられ、グローバル資本主義によって、ますます国と国、人と人の格差が「金」を基準に広がったからです。左派系は残留、右派系は離脱の主張のようですが「理念」が資本の動きによって乖離し、「EU平準化」によって、「損する人」「得する人」という一面に判断が流れていったのでしょうか。今後も「独立」傾向は各国で広がりそうです。安倍政権は、ただちに危機をすり替えて「政治の安定の必要」を訴える厚顔なところがすごいですね。どの国も「資本主義の成長神話の行き詰まり」。「民主社会主義」のオルタナティブの内容が問われる時代と言えます。世界同時同質の変革の時代!

6月29日 期待していたI子さんの資料、アラビア語があるとかで検査外部委託になるよう。そんな

ると、かなり長くかかるので、せつかくのニュースJRSも入手できません。残念!ただそのアラビア語訳の部分か、日本語のペイルートでの岡本公三を囲むPFからレバノン諸組織の会のことのみ受取れています。5・30の日なのか、かなり大規模のパレスチナ・レバノン組織らによる岡本公三に敬意を表す式典。PFLP主催ですね。友人たちの名もあって、まだ生きてリーダーの一員なのを知り、うれしいです。PFLP、PFLP-GCなどPLOファタハ含む諸派、ムラビトゥーン(ナセル主義者)や共産党やPNCメンバーやナジャハワキム弁護士も、I子さんの「天才的」語学力に感謝。資料待ちます。

また、例のフジテレビの「デタラメ番組」。「見ているうちに腹立ち、気分悪くなる代物で、「テロリスト」という言い様がまず気に入らないし、あなたの人権など全く無視で、タチの悪い「警察賛美物語でした」。腹立たしいのは「ハーグ実行犯」に仕立てて人権無視。体制批判タブーのマスコミ・メディアの行き過ぎは、こうした一つ一つの物語を信ずる世間の圧力となつてはね返る結果ですね。

6月30日 今日は久しぶりの晴。6月2日以来のグラウンドでの運動の木曜日。いつも木曜は雨で中止でした。獄舎を出てすぐくちなしの花、もう盛りを過ぎてしまいましたが香りがうっすら!グラウンドの芝の間にねじ花が点々と咲いています。クローバーとねじ花を摘んで香りをかぎながらゆるやかなジョギングでグラウンド一周半。あとはウォーキングで汗びっしょり。戻って「洗面器2杯3分以内」という決まりですが、タオルを絞って拭身。気持ちいい!6月28日から夏期処遇となって拭身が許されています。

7月1日 この間プリントなどアラビア語入りのものは翻訳後しか交付できないと言われていましたが、昨日翻訳は自費とのことで「願箋」を書いて、アラビア語の部分は廃棄または末梢の上他の頁のみの交付許可願いを提出しました。そうした手続きで交付は来週になってしまいました。

7月4日 パレスチナ、ラマダン入りの闘いの資料感謝です。6月8日パレスチナ人によるテルアビブの銃撃戦。「殺されたパレスチナ人の遺体は返すな」とイスラエル新国防相のリーベルマン。更に国際法に反する集団懲罰の家族の移住する家の爆破や、

オリーブの樹 第135号

ラマダンの西岸やガザからのエルサレムのアルアクサ・モスクの礼拝通過許可取り消しを叫ぶなど、リーベルマン国防相の数十倍返しテロ報復。闘いは激しくパレスチナでもシリア、イラクでも同様に続いています。

また資料からギリシャ政府がスエーデンに次いで欧州で2番目にパレスチナ国家正式承認見通しとのこと。急進左派スイリザがやっと承認です。

バングラディッシュでも IS 攻撃。現地のために働いていた日本人を含む外国人が狙われたようです。「自分は日本人だ！」と名乗って助けを求めた方も居たとのこと……。バングラディッシュは日本では考えられない程中東政治が近く敏感です。昨年安倍首相の不用意な発言と IS の宣言は当然いきわたって、アメリカらと並ぶターゲットにされています。バングラディッシュの若者たち、パレスチナ解放の闘いにも、82年のイスラエル侵攻前までPLOのボランディア戦士兼出稼ぎとしてレバノン南部戦線にたくさんいました。「出稼ぎでただ稼ぐより、実入りは少なかったけどちゃんとイスラームのためになり大義のために闘う方がいいに決まっている」などと言いながら。

また77年日本赤軍の「ダッカ闘争」の時にはダッカの政府官僚たちが72年のリッダ闘争を称えて、日高隊という作戦部隊の目標実現に大いに陰ながら支援してくれたのを思い出します。「米戦略の一部の日本」という姿は良心的な日本人の活動も、ビジネスも危うくしているのでしょう。

Aさんから成島さんが6月29日朝亡くなられたとの知らせを受け取りました。いろいろ助けて下さったブントの先輩でした。10・8ブントが大森海岸から高速を逆走して「羽田へ！羽田はすぐそこだ！」と走る直前、武者ぶるいしながら絶叫していた成忠、全学連副委員長の姿が浮かびます。Aさんと東拘にも面会に来て励ましてくれました。再会を約していたのに……。急性白血病で亡くなられたとのこと。感謝を込めて哀悼を捧げます。

7月6日 今日はラマダン明けでしょうか。中東では戦場でも中間をぬって祈り祝している人々、子どもたちの着飾った姿が浮かびます。今日は午前中の診察。CVポートのフラッシュと低血圧症についてどうかと聴かれました。相変わらずですが極力ゆっくり起き上がるなど心掛けていますと伝えました。

7月8日 今日は「創」や「紙の爆弾」プリントなど受け取りました。「創」には「オリーブの樹 134号」の癌闘病日誌をまとめて篠田編集長が載せておられます。生々しいところは省き、スマートにまとめて「オリーブの樹」の表紙の写真も載っています。励ましの言葉も添えて載せて下さってありがとうございます。

今日は「7・6の日」です。「我々の闘いは人々を幸せにできなかった。革命は人々を幸せにすることだなんて考えていなかったな……。でもやっぱり勝って人々を幸せにしたかったな……」ある時ある所で帰国して再会した旧友が言った言葉が浮かびます。そう、人々をいかに幸せにできるかなんて考えたのは私もパレスチナに闘いに行ってからだったし、「幸せ」という言葉もきっと当時「階級制のない言葉使えなよ」なんて批判されたらうし、「人民のため」という言葉は自分たちの闘い方、足下を見たらおこがましくて言えなかった……。

本当に人々のためになる社会・政治革命を考えていたならば、あんなおかしな派閥権力闘争など思いつかないでしょう。リーダーたちの自己中心的な世界観と競争心、それが理性や知性より優って感性に押されていたあり方。日本も世界ももっとより良く変えたい、変革できる！よく分からないけれど尽くしたいと集った無数の良心や正義感や意思を損なった党派的な闘い方は、資本の競争の思想と相似形のところがありました。そんな話を旧友と「7・6事件」の反省として語り合ったものです。その友人もすでに彼岸に逝ってしまった……。

今日はTさんから社民党応援の選挙ハガキが届きました。やっぱり福島さんに第一に国会に戻ってほしいです。社民党の抜本的な下からの基礎づくり、長期計画で親米自民党に代わる政権構想をたててほしいです。

ちょうど今「日本は何故『戦争をできる国』になったか」を読んでいるところです。「密約」の内容の基本がほとんど占領期のままなのは驚かされます。当初は敗戦の力関係で従わざるをえなかったとしても、その「うま味」を知り、味をしめ逆に自民党は「恭順戦略」を積極化。占領期から国民に対して「見映え」のする文章にこだわり、実質（軍の指揮権、基地権）は占領期のままで許してきた歴史がしっかり描かれています。自民党である限り対米従属は変わらないのが本でよくわかります。

7月8日 今日は「創」や「紙の爆弾」プリントなど受け取りました。「創」には「オリーブの樹 134号」の癌闘病日誌をまとめて篠田編集長が載せておられます。生々しいところは省き、スマートにまとめて「オリーブの樹」の表紙の写真も載っています。励ましの言葉も添えて載せて下さってありがとうございます。

開腹手術四回（摘出した癌は、大腸5小腸3子宮1計9カ所です）で友人たちも心配して下さったようですが、今のところ大丈夫です。お臍の上から下まで25センチ位ですが同じ縫合のところを開腹しています。人間の復原力に自分でも驚いています。

Kさん展示会上手くいったんですね。「原っぱ」のイメージの野の花々の色彩がみごとです。いちごつなぎ、ヨツバウンランセリバヒエンソウなど私も知らない名。きれい！ゆっくり休んで体調整えて下さいね！

「地域アソシエーション」のミゲル・ファハルド（コロンビアの協同組合運動の実践・研究者）との交流報告はとても学習になりました。様々な重層的な共同組合が地域社会の基盤となって、それが横につながりながら社会・政治変革を実現していくのは素晴らしい。政府と武装勢力の和解（あのキューバでの）のきっかけと条件を作りだしたのもこうした非武装の人民勢力なのですね。希望が実現されているのを実感。日本もそんなローカルパーティの芽はありそうですね。

7月11日 もう梅雨明けのような快晴です。

昨日は参院選の開票後すぐの9時に就寝で8時55分位にラジオも切れたので選挙結果はわかりませんでした。でも自公の圧勝は8時すぎの開票直後から理解していました。物騒な世界のニュースが増大する中「安定感」を求める傾向が強まっていたから。それに託したい野党に理念と強い共同がなかったし。これでは「投票に行けば変えられるかもしれない」というものがないので、低投票率だろうなあ……とっていました。

朝刊受け取って「改憲4党3分の2迫る」という大見出し。でもよく読んでみると与党系無所属3もいるし、民進党内改憲派もいるし「改憲4党160」とのことですが、すでに162の三分二（3分の2議席）は超えています。この現実から公明をゆさぶったり、闘い方をつくりながら政権交代を目指すかないようですね。でも投票率54.7%と低かったこと、野党共闘をもっと上手くやりぬけば今後はもっと成功するでしょう。それにしても拍手したいのは沖縄の勝利と、鹿児島知事選の野党一本化の勝利です。東京の細川、宇都宮分裂選挙を教訓に市民らが動いたのでしょうか。社民は厳しいですが新しい闘い方や、実際各地で活動している人々が新たに登場するのを期します。コロンビアの闘いのように地を



このような長期計画を立てて。

夏はやっぱりヨーグルトにニンニクと塩を少し入れて5ミリ位のさいころ状のきゅうりを混ぜたアラブのサラダがたべたい！それにタップーレ（レバノンサラダ）も。アラブサラダを作ってみて！元気の力になります！

7月12日 昨日の夕刊と今日の朝刊が午前中に届いて参院選の最終概括がつかめました。

前回2013年の絶対得票率（比例区）18%で議席の54%を占有した自民党、今回は少し投票率もあがり（前回52.61%、今回54.7%）19%の絶対得票率で45%の議席を占有。自民党は2割以下の国民の支持のもとでやりたい放題の政策転換をしているわけです。投票率を上げ、野党共闘可能な「国民合意」の政策を明瞭にし、魅力ある候補者やリーダーシップを育てていくことを10年計画位の展望で考えて政権交代を実現してほしいものです。

今回の選挙でわかったことは、民進は共産党との協力を育てない限り議席は増やせないこと。自民も公明なしには安泰とは言えないこと。選挙制度を変革するまでは野党共闘を育てて闘う以外ない日本の政局。自民の補完で利権のうま味を覚えた公明は、自民のかつての「汚れたハト派」のような役割を果たしつつ、ずるずるいきそうです。

マスメディア、TVの報道の仕方、非政治的な「中立」という名の体制権力への従順さなど「日本の空気」の偏りですね。常識は良識でないとしみじみ実感しています。

7月15日 房の引越し。3ヵ月位で引越しです。今日から冷し枕が使えるようになりました。昼も必要なら(温度によって)今年から使用可能になったとのこと。小雨で肌寒いので、昼は不要で夜使いますと伝えました。引越しで床の雑巾がけや虫退治で汗びっしょりとなりましたが、昼膳に西瓜が一切れ、おいしい西瓜を頂きました。

7月16日 もう連休に入っているので受信物もなく静かです。

夕方のラジオニュースでトルコでクーデター失敗とのこと。エルドアン大統領を抑えなかったクーデターってどうよ……という気がします。彼個人を制圧なしにクーデターは成功しないでしょう。手違いがあったのかもしれませんが、でもこれでエルドアンがクーデターを口実にして政敵を次々と逮捕し、言論を封鎖し、益々強権化する自由を得てしまったことを危惧します。

パリ祭のニュースでも無差別攻撃。に対するIS空爆や戦車を止めない限りグローバルな反撃は続かざるを得ません。空爆下の人々、殺され続ける人々、忘れてはいけない命です。

7月22日 夏休みに入ってから雨続きです。今日の大暑も寒いくらいです。

土曜日レポートも届きました。6月の土曜日は、特別寄席がいいですね。三寿師匠と共に、明大出身花柳圭花さん2つ目昇進祝いの特別寄席に「祭」も大賑わいです。“花”の名がついていたので女性か?! と思ったら五分刈り? 坊主刈り? スキンヘッドの若者! 聴きたいなあ、いつか! きつと真打ちの落語が聴けるでしょう。

また、二木啓孝さんの参議院選分析・予測や「国民怒りの声」の動向について、前田和男さんの話など、ずいぶん貴重な話だったようです。三里塚五〇年の集いや、10・8山崎博昭プロジェクトの6月イベントや、参加した方々がそれぞれの職業や活動の場を持っていて、相互報告が即連帯になるのが土曜日のいいところです。



「パレスチナ子どもの里親運動」をやっておられる人も参加しているのですね。レポートを読みつつ、メモしていた参院選結果と照らし合わせたりしています。

パレスチナ資料で、毎日のようにパレスチナの若者たちが殺されたり逮捕されている、イスラエル軍との攻防を読みました。ラマダン入りしてから3週間の間に、パレスチナでは330人以上が捕まっているとのこと。国連にカルテット(国連・米・ロシア・欧州連合で、ブッシュ息子時代に「和平イニシアチブ」としてつくられた)が提出したレポートによると、イスラエルは西岸地区をイスラエルのものとするやり方が続いているのがわかります。

西岸地区の約60%はC地区(イスラエル完全占領地)で、そのうちの70%を独占的に使用し、その多くを軍事閉鎖地区としていると指摘しているとのこと。C地区を、パレスチナ自治政府への返還を進めるべきこと、この地でのイスラエルが進めている入植地の新・増設を止めるよう、レポートは求めているようです。また、イスラエルにC地区のパレスチナ人の住宅建設・水道路・交通通信・農業基盤整備など、許可するよう要請すると述べている。

カルテットは常にイスラエル寄りの和平案を示してきましたが、現状打開にはイスラエルの西岸占領と入植拡大を辞めさせることを、やっと言い出しています。勿論イスラエルは無視するでしょう。今ではパレスチナの若者たちの決起への報復に、入植地の住宅建設増加を許可しているネタニヤフ・リーベルマンコンビです。大国がISに介入するように、イスラエルの数々の国連決議・国際法無視に向かい合い、介入することなしには、パレスチナばかりか中東の混迷は鎮まることはありません。

今日は大暑なのに雨で肌寒いです。菊の花が届きました! 白菊、えんじという濃い藤紫色、橙色、細い花びら、変わり種うす黄緑色の四色のスプレーの夏の菊です。こんな色の菊が!? という美しい花。菊の香り。リラックス感一杯! みんなの支援で花も購入できています。感謝。(月一回可能です)

7月28日 相模原障害者施設に対する攻撃で、19人が殺され26人が怪我、とのニュース。匿名によるネットでのヘイトスピーチや、公然とヘイトスピーチが横行する今日、ナチス時代を思わせる差別浄化思想が許されるような日本社会なのではないか……。しかも、衆議院議長宛に2月に計画を記してい

たとのこと。その時点で、広く断固とした思想的反撃をする方法はあったのではないのでしょうか。障碍者施設だけで警戒・防御はムリでしょう。弱いもの切り捨ての国のトップや官僚などの風潮が、ヘイトスピーチや差別を日常化させていると、とらえる必要があります。

米大統領選、クリントンが正式に民主党候補に選ばれました。エルサレムの「ユダヤ化」を支持し、テルアビブにある米大使館をエルサレムに移すと公約したトランプと、かつて同様に賛意を示し、自分が大統領になったらネタニヤフを招いて特別な両国関係をめざすというクリントン。もう十分、米政策はイスラエルと特別特権を許す関係なのに。パレスチナ・アラブにとっては良いことなしの二人。「米国第一」で、中東介入を減らすなら、(本当かどうか不明)「トランプの方がまし」と、アラブの人々は思っているのでしょうか。

今日さつき梅雨明けの東京。これからやっとな猛暑! 夏を楽しみたい。梅雨続きでしたから。8月初めは土曜日。みんなによろしく。また、柳田さんより9月3日の反断集の知らせ、ありがとう。暑い夏を8・6広島から長崎、そして反戦の闘いへ! 共に!

7月31日 七月尽。梅雨がながびいたので夏の実感がないうちに7月が終わります。この週末はやっとな夏らしい快晴です。

シリアの攻防はどうなっているのかなと思っていたところ、ちょうど新聞記事。ヌスラ戦線リーダーのジャウラーがカタールのアルジャジーラで動画声明を発表したとのこと。「アルカーイダからの離脱」を表明し、組織も「征服戦線」と改称し「新組織は外国勢力と一切つながりを持たない」「シリアの革命を守るため」であるとのこと。同日アルカーイダのザワヒリが「容認声明」を発したそうです。空爆対象となっているのを回避させるためとの記事。

ヌスラ戦線に対して去年の春からサウジとカタールはアルカーイダと関係を断ち、米欧の容認するシリア反体制派の一角を占めるよう働きかけていました。反体制派の主要勢力がヌスラ戦線だからです(推定勢力1万人)。そうすればスポンサーであるカタールも大っぴらに武器・財政をもっと支援できるし、またポストオバマの米政策でクリントンの主張していた「対アサド政権勝利のためにシリアに飛行禁止地域を設ける」ようサウジらは求めつつ軍

事的政治的勝利の戦略を練っているでしょう。IS掃討から反アサド政権へとシフトしたいようです。でも、今後の動き(停戦と政治交渉)は、昨年末安保理の描いたシリア問題解決への政治的流れには至らないでしょう。政権含めて自らの支配地域を固めつつ交渉は進んでいません。

アサド政権は2020年春に二期目の後期を終え、改正した憲法では三選は不可なのでその節目に向かって戦略を練っているはず。まだ膠着が続くような状況です。パレスチナは仏イニシアチブの和平が提唱されカルテットも「占領地入植」を問題にしていますが、リーベルマン・ネタニヤフコンビは軍事弾圧支配を常態化させています。

シオニスト左派もネタニヤフ政権批判を繰り返していますが、クリントンもトランプもイスラエルの右傾化を促すような米国内イスラエルロビーへの迎合ぶりです。クリントンになれば対イラン政策でもイスラエルの要求に沿うのでしょうか。中東の混迷は続きそうです。

ISを空爆することとグローバル「テロ」は一つの合わせ鏡。何よりも空爆を止めて難民たちが自分たちの故郷に暮らせる戦略こそ必要です。

ちょうどラジオで8時ちょっと過ぎたばかりなのに「小池百合子氏当選」とのこと。本人も自民党ながら既得権益や政党に対決する構図を作り東京の改革にやる気十分。変えてくれそうと変化を求めた都民の支持が集ったのでしょうか。知名度だけで都政策もしつかりせずに「野党統一候補」で勝てると思ったのか、準備不足、週刊誌の妨害キャンペーン、魅力のなさで鳥越俊太郎は敗れたのでしょうか。「知名度」なら都民の切実なことと結びつかないと勝てません。選ぶプロセスも下から透明性を持って何人からみんなが野党統一候補として選ばないと……。民進党の古さが今後も政策上も問題になりそう。

ちょうど「日本会議の研究」を読んだところですが、市民・良識派または共産党以外の左翼の側は「合法的な政権奪取」に焦点を合わせてかつて闘ってこなかったけれど、10年20年の時間軸の中で社会を変える政権を変える戦略をしっかりと実現したい日本です。

8月6日 晴。白かった空が、8時15分には青空と入道雲に変わりました。

「平和の鐘」を心に聞いて静かに黙祷。被爆者のために、そしてパレスチナ、シリア、イラク他で犠牲

になった人々のために。朝刊には、オバマ大統領が国連で「核実験禁止の決議」めざして模索中とのこと。核廃絶に向けた、国連核軍縮作業部会で、「核兵器禁止条約」で139カ国が賛同しながら、米国含む核保有国は絶対反対。日本も追従しています。オバマの「レガシー」としてしか前へ進めない、実は権力を持っていない大統領です。核を「特殊視」するのは当然としても、通常兵器を湯水のように拡散させ、ドローン殺人のNo.1がオバマ政権。ニューズウィーク誌でも「米軍事予算の増加が止まらない」。16年は5,800億ドル、17年は更に22億ドルの増額を連邦議会に要求しているとのこと。

8月7日 立秋です。猛暑は続いているのですが、7月中旬以降ずっと梅雨だったので、夏気分はこれからまだ続いてほしいのです。立秋になると朝夕は涼風ですが、今日までまだ熱帯夜はありません。蝉も鳴かないうちにもう秋でしょうか……。オリンピックが始まりました。金メダル第1号とラジオから。獄とは無縁の喧騒です。

8月10日 友人の手紙で、7月21日に友人のテシール・クッパさんが亡くなられたことを知りました。PFLPの国際関係委員会の責任者として、また、その後は長くパレスチナ民族評議会(PNC)副議長として、パレスチナ解放闘争を導いていました。西川さんのダッカ事件無罪を訴え、西川公判に書面を提出して証言してくれました。また、9月から始まる城崎公判でも、当時のことを知っている最後の証人ではないか、と考えていたところです。

テシールは、私が71年ベイルートに着いてから少しして、イスラエルから釈放されてベイルートで活動を始めました。パレスチナ全学連委員長であり国際学連委員長であった彼の不当逮捕に、キューバ



の機関紙グランマやソ連、東欧、西欧から抗議と釈放を求めるキャンペーンが広がり、結局釈放されました。以来、ベイルートを足場に、PFLPのリーダーの一人として活躍し、日本赤軍のみんなとは率直にやり合い、共に闘ってきた親しい戦友でした。90年代、アンマンを拠点にパレスチナ解放をめざし、疲れを知らない闘いぶりだったのに……。

東欧や北アフリカの宿舎やホテルで、90年代も語り合ったのを思い出します。76歳だったそうです。「マリアン、アラブはどうしてまともにならないか知ってる？ みーんな政治のプロフェッショナルばかりだからさ」とか「モスクワの国際学連の会議で日本の平民学連と全学連の参加資格をめぐる争い紛糾に、議長としてミスター石井のブンド全学連に軍配あげたんだよ」などなど、弁は立つし自信満々の彼。最後の交流は、数年前私の癌治療を知り、友人を通して励ましてくれました。私たちはいつも彼に抗議したり助けられたり……。良い戦友をまた失いました。合掌。

8月11日 8・11 というと、私たちには79年の日本赤軍のことが「山の日」より浮かびます。8月11日のある失敗から「党の革命」を、みんなで目指した日だからです。

「紙の爆弾」に、「宗教選挙としての2016参院選」という記事が載っていて、新聞では伺い知れない底流を学習しました。安倍政権を支える中核的存在の創価学会、神社界や保守的な宗教団体が参加している「日本会議」に「世界家庭連合(旧統一教会)」らが一方にありました。が、もともと「右翼イデオロギーの培養器的役割」を果たし、日本会議を生む基盤となった「生長の家」は「与党候補と改憲勢力を支持しない」とする教団方針を発表したとのこと。かつては「生長の家政治連盟」を組織し、今の「日本会議」の中核と安倍ブレーンを占めている「原理主義勢力」を一掃した「生長の家」その「生長の家」が安倍政権を批判し、不支持を呼びかけると、護憲の立場に立つ「立正佼成会」も「生長の家」に賛同。激しい攻防だったとのこと。ことに、地方の野党との一騎打ちの選挙区では、日本会議の県本部長が「日本の平和と自由と民主主義を守る会」などリベラルを装って、怪文書を新聞折り込みピラで野党誹謗をやらせたことは「赤旗」が暴露したなど。地下・非公然に改憲の謀略は広がっていますね。

もうすでにお盆休みでしょうか。元気な夏を！

★読んだ本★

重信 房子

「シニア左翼とは何か」(小林哲夫著・朝日新書)を読みました。著者はこの本の作成にあたって、土曜会の集いに参加したり、また、私にも質問書を提起されていました。人と会い、フィールドワークを選別して文にしていくジャーナリストらしい著書になっています。浅く広く自らの信条を抑制した「日本の記者のやり方」を踏襲したシニア世代の分析と概括の書と言えそうです。

著者は2015年の安保関連法案をめぐってSEALD'sの登場と時を同じくして国会前を埋め尽くす万を超える人々、その中でシニア世代が圧倒的に多かったと現認してきました。この現実を社会現象ととらえ、シニア世代のこうした人々を「シニア左翼」と位置付けながら、その人々の生きざま、動機人脈、歴史領域、職業などを鮮明な姿に描きあげています。

シニア世代の登場を社会現象としてとらえている第一章は、映像を見る条件のない私にも臨場感をもって理解できるように、エピソードや数値などで示されています。シニアの参加者たちの多くが「楽しそう」であり、その描写はとて実感できます。

私にとって、日本での学生運動、革命運動は多くの限界がありながらも、「日本を変えたい! 世界を変えたい!」という希望への献身でした。72年の「連赤事件」や「内ゲバ」で、現在の視座からとらえると「悲惨さ」や「過ち」に覆われていたようにとらえがちですが、多くの人が希望と生きがいと楽しさの中で、闘った時代でもあったのです。

無名のシニアの多くは、当時の思いと同時に敗北を苦くとらえつつ、価値観を大切に生きておられたその総括として、今も戦争法反対にかかわったと思います。闘いは苦しい以上に楽しいものですから。

第二章では、SEALD's 若者の姿に希望を持った人々の姿が伝えられていますが、SEALD'sの保守性はベ平連の原理と多様性には及ばないと思います。時代の閉鎖状況を破る突破力は評価しますが、シニアの支えがあってこそその若者たちです。

その意味で、第三章の14,000人を超える学者たちの行動に、私はSEALD's以上ある意味期待しています。まっとうに学者が発言すること、全国的なネットワークを維持しながら、その立場から、次々

と入学してくる若者たちに、良くも悪くも、思索の機会を与えることができるからです。私たちの時代、闘いの「市民化」をむしろ嫌い、教授会を大学理事会当局同様追求し、闘いの継承性やコミュニケーションよりも、先鋭化させる運動戦に価値を置いてしまいました。結果として、一過性の社会からの孤立を自らの狭さで招いたのです。当時学生だった「学者」含めて、知の社会化を政権の変革に活かしてほしいです。それは「選挙に出る」とかよりも、もっと縁の下の確かな力として育ててほしいです。

また、この本では、かつての友人、知人の消息や現状をいくつか知ることができました。

著者は今後もシニア左翼が非暴力直接行動に生きがいと楽しさを求め広がるだろうと見ています。戦争法に反対し、戦争を起こさせてはいけないとする次世代に対する責任と考えていることが「生きがい」となり、その実行は楽しいので、「シニア左翼の時代は続くであろう」と、結論付けています。

動員のイベントがない時でも、著者と交流しうる場を育て、シニア世代の闘いの機会を広げ、社会変革を育ててほしいと願いつつ、読みました。

(5月7日)

今日は資料や雑誌と一緒に「SEALD'sの真実」(田中宏和著 鹿野社刊)を受け取り、タイトルに魅かれて集中して読みました。

SEALD's運動とは何だったのか、新聞などで報道されない動き、とくにSEALD's裏の「防衛隊=しばき隊」とはどんな活動をしているのか? など。著者がネットで一貫して明かしてきたことを一冊の本としているものです。「本書が試みているのは、

SEALDs としばき隊に対する理性的な批判である」として「辺見庸が批判した立場と観点に立ちつつ、SEALDs 運動の真実と意味を政治学の言葉で対象化しようと模索したもの」と著者が述べるように「SEALDs の浅く狭い言論と言説」「政治学の概念も深みもない」小堀英二や「左翼リベラル」が支持し、マスコミが焦点化することによって、問題をズラしてしまっただけととらえている。

長谷部恭男教授が憲法審査会で、安保法案を違憲と断じた6月4日以降、明らかに世論は法案阻止へ傾き、安倍政権の支持率は低下していった。国民は憲法学者の立憲主義の講義に啓発され、憲法学者の反安保・反安倍の主張に熱心に耳を傾けて肯いていた。あのまま木村草太・石川健治・長谷部恭男・小林節の4人が出演し続け、立憲主義の概論の教育と啓蒙があれば、もっと支持率は低下しただろう。それをTV局はSEALDsに主役をきりかえたこと、彼らは決して60年の安保闘争の反戦の深い思想に及ばない。「しばき隊」は、いかに自分たちに反対する人々を、ネット空間で挑発恫喝・デマ誹謗・個人情報晒し・集団リンチを行ってきたか、それらがブーメランのように自分たちにふりかかっている様etc.

著者は「いかにげんなりした人々」がいかに軽薄にSEALDsにかかわっていて、本質的な問題の掘り下げをイベント化してしまっただけで、結果、安倍政権の安泰に至らしめていると批判しています。また、SEALDsをサポートしている「しばき隊」の正体、たとえばネット空間でネトウヨ側弁護士や在特会の女性を「お前の赤ん坊を豚のエサにしてやる」「このブス」などと批判する、レベルの低いヘイトスピーチのしばき隊員の匿名氏が、実は新潟日報の報道部長だったことがバレたなど、詳しく暴露しています。

自らを相対化し、俯瞰しとらえるのは、だれにとってもその持続は難しいと、批判する方・される方を思いつつ読みました。「不十分」「ダメさ」赦しはしなくても、それを前提に安倍政権を沈没させる方向と方法に布陣してほしいものです。



この著者の、ふわふわした「進歩派」のあり方への（私は「誠実さ」と獄中で見ているのですが）批判の一貫した観点、原則、その「意固地さ」は魅力的ではあるでしょう。（5月23日）

「日本はなぜ、『戦争ができる国』になったのか」（矢部宏治著・集英社インターナショナル刊）を読みました。日本は何故米国の言いなりになるのか？米占領下の1945年から52年、さらには52年の安保条約から60年改訂安保条約に、必ず密約があったこと。それらが米側の公文書の機密解除によって見えるようになった中で、その歴史と構造を解明していくのがこの本です。み

序章から、日本の表玄関である首都圏の上空が、今もほとんど米軍管理下にあり、都心の六本木に米軍基地（ヘリポートや施設）があって、米軍関係者はパスポートなしに米軍基地から日本中を移動する特権を持っていること。こうした治外法権は今も数々の問題、特に沖縄問題の原因となっていることは知られているところですが。こうした構造は、占領期からサンフランシスコ講和条約と同時に締結された安保条約と行政協定（のちの地位協定）時代から継続しており、その実態は「日米合同委員会」に顕著であることを示しています。

この「日米合同委員会」の姿こそ日本の権力の実態です。この委員会の日本側は、外務省北米局長を代表に、法務省大臣官房長を代表代理とし、農水・防衛・財務・総務省などの局長クラスの超エリート官僚が参加し、米側は、在日米軍副司令官を代表に、在日大使館公使・在日司令部部長・陸軍司令部参謀長・空軍司令部副司令官・海軍司令部参謀長・在日米海兵隊基地司令部参謀長が参加するものです。「どんな国にもない極めて異常なメカニズム」と、駐日アメリカ公使すら証言しています。米務省が普通、カウンターパートナーとなるべきところ、駐留米軍が日米合同委を仕切っているのです。つまり、60年以上続く「米軍と日本の官僚共同体」が日本の法的権力構造のトップに君臨したままだということです。この「日米合同委員会」が検事総長まで出すというシステムまで出来上がっていることを明らかにしています。

次の章では、二つの密約「基地密約」と「指揮密約」が存在していたこと、今もそのくびきのもとに

あることを、著者は追跡していきます。米軍が日本の基地を自由に使うこと、米軍が日本の軍隊を自由に指揮できる密約があったのです。米国は占領下の米軍の特権を、いかに損なわずに保持するかに腐心します。特に冷戦から朝鮮戦争勃発の時です。GHQ米政府は再軍備要求もしてきます。マッカーサーは失脚していくのですが、この激動の中で講和条約と同時に結ぶ52年安保条約によって、米占領時代と同じ特権を得ようとしています。

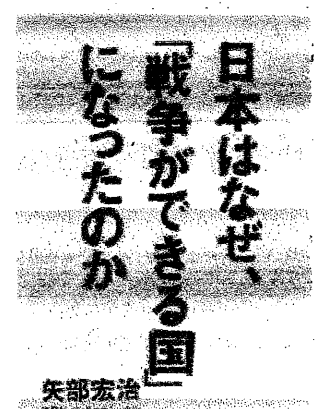
力関係の弱さもありますが、米要求を認めつつ日本側は、条約や協定によって国民に批判されそうな文言を書かないことばかりに注力して文章をまとめていきます。吉田首相らは「再軍備計画や緊急事態また戦争への対応について、徹底的に研究し計画を立てさせると共に、駐留軍の基地経費や法的地位について日米合同委員会で研究させ扱うこと」にしていくのです。そうして文言にあった米軍の戦略統一指揮権記述などを削除していくことになり、そのまま実際の話は国民には見えにくい「日米合同委員会」で決められる構造になっていったのが始まりだったようです。

52年の講和と共に締結した52年安保条約時に、朝鮮戦争時期の米軍指揮権を認めたまま、それは引き続いて60年安保改定でも同じように継承していきます。「裏でどんな密約を交わしてもよい。表の見せかけが改善されていけばよし」とする岸首相と藤山外相の行政協定改定についての立場は、当時のマッカーサー駐日大使の極秘電報の開示で、今では明らかにされているとのことです。いわく「彼ら（岸・藤山）は、かなり多くの改定を考えていますが、その多くは形だけのもの、すなわち国会に提出された時に、行政協定のみせかけを改定するだけのものです」とワシントンに伝えています。

一事が万事、占領下の力関係の中では、「頑張った」ように見えたかもしれないが、国民の目に触れないように基地の自由も指揮権も売り渡してきたのです。特に岸になると、その「うま味」を自覚していくのです。つまり、これまでのままの方が日本独占資本にとっても政権維持にも利があるとみたのでしょう。私が見るところ「米軍の押し付け」というよりも「恭順」戦略ともいえるやり方です。

マッカーサーが天皇を利用してポツダム勅令を憲法制定まで使ったように、米国を利用し彼らの軍事権力を維持したい思惑を受容し、国民を治めるやり方に「うま味」を見出したのです。米国と運命共

同体のように、たいがいのはハイハイと受ける自民党の戦略と言えます。安倍政権の戦争法もこの中に位置していまに専守防衛論に利を見出した自民党は、その制約を自ら取っ払い、米戦略のグローバル化に国民を動員しようとしています。



この本は、米軍が日本の軍隊を昔から（まだ警察予備隊をつくり出す前の時代から）米軍指揮権の下で生まれ育ってきたこと、条約などの作成当事者のダレスらが使った手口が、公文書を引用しつつ明らかにしています。この本の「最後の秘密・日本はなぜ戦争をとめられないのか」の中で、米軍指揮権を認めさせるために、「国連軍の米軍」と「駐在米軍」という米軍の概念を二つに分けて、論理操作した法的手口が解明されて、まさのミステリー・サスペンスのように日本史を遡って知ることができます。なかでも砂川裁判で「伊達判決」を否定するために最高裁判決で行ったことは、日本の主権放棄ともいえます。この日米支配者の思惑を明らかにしているのは全く同感です。「統治行為論」です。私もこれが憲法を骨抜きにしたと前にも書いてきました。この「統治行為論」の唐突な判決の中の文は、「二度と基地権や米軍の指揮権に口出しを許さない」宣言のごとくであり、この「統治行為論」こそ憲法違反です。

最後に著者は、憲法改正によって米軍を撤退させたフィリピンや東西統一とEUの拡大によって主権回復したドイツなどを挙げながら、日本について「自分たちは政治について自己決定権がある。だから諦める必要はない」と主張しています。勿論です。米国に依存することで利を求め、「見映え」だけを重視して米軍の要求のままにしている自民党戦略を自覚し、新しい政権を樹立していくことこそ、日本の主権回復を実現する道です。

この本は、日本の歴史を知るために、中学・高校の社会科学教科書にふさわしい、わかりやすい記述です。日本の戦後歴史がわかり、目を開かされ、何をすべきかを教えてくれる本、若い人に読んでほしいです。（7月13日）

オバマの広島訪問について

原子爆弾被爆者 米澤鐵志

今回のオバマ訪問についてマスコミは歓迎ムードを作り出したし、安倍はその失敗を覆い隠すためサミットと広島開催を最大限に利用しようとしたし、その意味では成功した。

残念ながら、日本の戦争責任、なかんずくアジア侵略を批判、反省しながら、アメリカの原爆投下の誤りを指摘して反核運動を続けその軸になって、「核と人類は共存できない」と訴えてきた、多くの指導者が鬼籍にはいつてしまった。

そのため多くの被爆者が有名無名を問はず、オバマの広島訪問を歓迎、ないし好意をもって対処していた、例えば「はだしのゲン」の中沢啓治夫人は中沢が生きていたらオバマ来広を喜び、「謝罪してほしい」と思っただろう、と談話しているが、作品の中で原爆投下をナチのホロコトと同じと言っていた。

しかし他の被爆者や遺族はやはりマスコミが作りだす歓迎ムードの誘導に乗せられている。式典の後の被爆者坪井との握手も私には空々しく感じられたが、直後に抱擁し涙を流していた森重昭とゆう人はアマチュアの歴史家で被爆死をした米軍捕虜の研究をしていたらしいが、一般には知られておらず、一部の米空軍関係者にしか知られていないようだ。最初が当時の米軍捕虜を式典に招くとゆう構想だったらしいが、前記森氏が被爆者であったこともあり、登場したようだが、安倍の配慮かアメリカ側の要求かはわからないが、謝罪を拒むアメリカ側をどうしても、広島に連れていきかけた安倍の意向が伺われる。

私も複数のマスコミ取材を受けたが、そのなかで述べたのは、戦争終結のための原爆使用説は、当時の敗戦必至の日本の状態を見ればウソであることは明らかであり、本当のことはトルーマン大統領が戦

後政治を見据えた使用であった。

しかしこの使用は「核」の管理が現在でもできないことを考えれば、明らかに人類や地球に対する「犯罪」であり、未来永劫批判されなければならない。その後「核」を持って世界支配を目論んだ、アメリカ政府の歴代の大統領も同罪に近い。

私はオバマが登場間もなくプラハの核廃絶の声明を知ったとき、オバマは歴代大統領と違い、核廃絶の具体的処置に着手すると歓迎したが、IAEAと

ゆう五大核保有国を軸にしたダブルスタンダードの核廃絶の障害になる制度を支持したし、レーガン、ゴルバチョフと共闘しての核弾頭削減も全く行詰まり、それどころかイスラエルの核保有の黙認、インパの核保有を認めて来た。

私は広島の下には、特に爆心近くには無数の骨肉が埋まっており（私が中学生時代、被爆2年後には、あのT字型の相生橋の下の川の中にはまだ骨が散乱していた）米軍最高司令官が謝罪なしにそこを土足で、まして岩国基地で米兵を激励し、オスプレイまで動員して下り立つことは死者に対する冒瀆以外のなにものでもない。先日もある広島の友人と話していたら「トルーマンは悪いがオバマはその時はまだ生まれとらんのじゃけん、わしらに戦争責任を問うのと同じで納得できん」といったが、日本人の感覚には、自分の父や親せき、兄が犯したアジアの人々に対する戦争犯罪を、終わったことにしようとする風潮が多いがこうした考えが安倍を生み出し、ヘイトスピーチを生み出している。

ともあれオバマは米日政府の思惑どおり、日米同盟の強化とアベノミクスの失敗を糊塗するために来日したと思って間違いないだろう。

今回のオバマ日程を見れば先述した基地岩国から広島に入り慰霊碑に献花（これも外来者の儀礼的のものでマスコミや一部の評論家が言う哀悼、謝罪ではない）後、原爆資料館の視察が（これは被爆者の多くが一番望んでいたが、それはあの残酷と悲惨を見ればどんな人でも、核の恐ろしさを認めるだろう）わずか10分、模型の地図を見る時間もないぐらいの短時間で被爆者の歓談とやらも屋外でハグし合う程度でまったく素通り状態であった。

声明も具体的なものはなく、彼自身が認めているよう「核のない世界の実現は私の生きているうちは難しい」とは、私のように反核運動を65年以上続けた老人が言うならまだしも、世界最強の大国で最初の原子爆弾を落とした国の、最高の権限を持つ人間の言葉とは思えず、「核廃絶は見込みありません」と正直に告白したとしか思えない。

謝罪については、アメリカの世論について云々があるが、先述したように彼らの犯罪を隠蔽させたものであり、それでも最近では、六分四分ぐらいになっており、アメリカン大学のピーター・カズニックのように数十年前からトルーマンの犯罪と告発し、映画監督のオリバー・ストーンや多くの著名人がその意見を支持しているし、オバマ自身がその気になれば謝罪できることである。

核と言えば原爆もしくりで、かつてアメリカのア

イク大統領が「核の平和利用」を唱えたがそれも原爆をはじめとする膨大な軍事産業を輸出させるための「核拡散」であった。

原爆も原爆も人類破滅の恐ろしい凶器であり、最初に使用した道義的（私は思わない）責任とゆうなら自ら率先し具体的行動「核」の完全廃棄を行うべきである。

日本の平和憲法のように！

2016年5月27日

私はオバマ大統領の被爆地広島訪問が、きれいごとで済まされ、安倍のアジア侵略の否定とオバマの世界戦略の忌まわしい同盟が1本のマスコミをはじめ、日本の戦争責任やアメリカの人類に対する犯罪を、歴史から葬り去ろうとする流れが許されないと考えた。

リッダ闘争44周年記念岡本公三表敬式典

パレスチナ解放人民戦線

6月3日、レバノンで、リッダ闘争44周年記念岡本公三表敬式典が行われた。以下は、PFLPのホームページによる報告の要旨です。

6月3日、リッダ闘争44周年を記念し行われた岡本公三（アハammad・オカモト・コーゾー）を囲む表敬式は、パレスチナ国歌で始まった。そして、ファダー・アブドル・ファターハ弁護士が式典主催者として以下のように述べた。

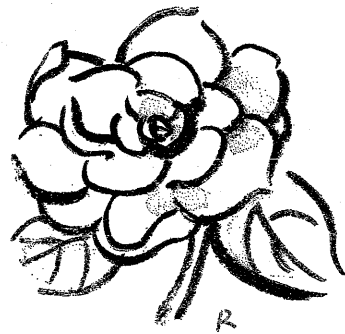
「その作戦は、最初で最後のものであり、闘いの過りを正すコンパスであり、世界の人々にとっての命題を示した。リッダ空港作戦の戦士たちは、遠い国から短い人生を携えてやって来て、シオニストが暴力で奪った人民の大地・占領されたパレスチナを取り戻す闘いに加わった。戦士たちは、44年前リッダ空港に降り立ち、シオニストたちに銃弾を浴びせた。我々は彼らのために、そしてパレスチナのために、今日ここに集まったのだ」と。

続いて、PFLPの代表が次のように語った。
「彼らリッダ作戦戦士の3番目の戦士、ここに居るアハammad岡本に敬意を！ パーシム奥平、サラハ安田と共に担った3人の英雄的な闘いは、昔話として消え去ることはない。彼らは、深く根付いた自由と解放の国際的シンボルであり、伝説的な英雄であ



る。国際主義者は闘いの中にあっても、時の壁を越える。彼らの精神は、我々の青年たちを新たに生み出した。彼らは屈辱を破壊し、その闘いによって追放された人々の尊厳を導いた。

このリッダ空港作戦の偉業達成は、リーダーのDR. ワディーア・ハッダードの知性のたまものであった。彼は我々に「占領がある限り、闘いの不幸は続く」という教訓を教えた。リッダ空港作戦から35年後に、敵シオニストは「ガッサン・カナファエニの暗殺は、リッダ空港作戦に対する報復である」と認めた。さらに、アブ・アリ・ムスタファ議長は、殉教者となった。我々のその報復は人種差別主義者ゼエビ（当時のイスラエル観光大臣）の殺害をもって行われた。アハammad・サアード議長は、それを口実に捕虜となっている。



本日、ファシストの独房で長い人生を過ごしたアハammad岡本同志の隣席の下、岡本公三自身の言葉をもう一度伝えよう。

「私は世界革命のために闘う日本赤軍の兵士である。私はPFLPと共に闘う。もし、私が死んだら、天上の星となるだろう。」

日本人アハammad岡本公三に敬意を！ 捕虜交換リストの一番目に置かれ、自由を剥奪された同志に敬意を表する。身体的精神的拷問の13年の後、1985年PFLP-GC（パレスチナ解放人民戦線総司令部派）が実行した「ガリラヤ作戦」によって、彼は自由を得た。その年月は彼の人間性を引きはがし、記憶と時間感覚の破壊に対する不断の苦渋の闘いであった。

第一番目の政治亡命者に敬意を！ 1997年、レバノンで公三が投獄された日、愛すべき公三と友人たち、そして彼らへの救援活動を中断せざるを得なかったすべての人々のことを愛情をもって思い出す。2000年、レバノンでの最初の政治亡命者として、彼は再び自由を得た。

自分自身に打ち克った第一人者に敬意を！ 数日前のリッダ闘争記念の日、シャティエラにある殉教者墓地の作戦を象徴する大理石の碑の上に公三はうずくまり、花束と線香を捧げた。共にリッダ闘争を闘い抜いた同志たちのために。

国際的レジスタンス戦士公三に敬意を！ 預言者は美しい夢である。彼は血をもって闘い、監獄で、独房で、痛みと弾圧下で、また難民キャンプで自由な夢に満ちたパレスチナを呼吸する。この大地を覆いつくす、パレスチナの花で彼は満たされる。

我々は、愛と国境なきヒロイズムと世界の不正に対するインターナショナルな闘いへの心の底からの敬意をこの大地に誓う。」

救援グループ「公三の友人たち」から、日本赤軍3人の青年が実行した英雄的なリッダ空港作戦、そ

して1985年の捕虜交換作戦を経て、シオニストの監獄から出た後の公三が体験した苦難についても語られた。それは、謀略によって不意に起こった日本政府当局への日本赤軍メンバーの引き渡しに至るレバノンでの逮捕と投獄が行われたことである。しかし、パレスチナ・レバノンの同志たちの抗議は、公三のレバノン政治亡命を実現させたのである。

様々の人々が発言した。PFLPレバノン代表、PFLP政治局員、PFLP政治関係責任者、レバノン組織のムラビトゥーン代表、PFLP-GCレバノン代表、レバノン共産党代表、PLO諸組織、駐レバノンパレスチナ大使、PNCメンバー、岡本救援グループ「公三の友人たち」などが参加した。

詩人がこの良き日、すこやかで信仰の高い二つの詩を朗読した。次いで公三の人生を綴ったビデオが映し出され、彼に表敬の盾が贈られた。

134号の誤植の訂正とお詫び

2頁本文11行 兵士行為→兵士の行為

2頁下から6行 特別管理地域→特別国際管理地域

4頁3行 ニュース→ニュース

（「一」の縦書きが見つからず縦棒を入れたのがこうなった）

6頁左列8行 南朝→難聴

6頁右列11行 香子花→香る花

9頁左列8行 ねげし→のげし

10頁左列下から7行 医務部長ととなる→医務部長と一緒に、モニターでチェックしておられた人が執刀医となる

11頁左側下から12行 わかって分かって→分かって

12頁右列1-6、25行 血中酸素チェック

→血中酸素と心拍チェック

16頁右列16行 細かい金属→細い金属

20頁左列22行 1909年に、→1909年の

20頁右列6列 民族解決闘争→民族解放闘争

後記

今号は8月14日に発行するつもりでしたが、編集室の手違いで、28日発行にせざるを得ませんでした。遅くなつて申し訳ありません。

PFLPのリッダ闘争44周年記念岡本同志表敬式典の報告は、読者のお一人がアラビア語から訳して下さったのをかわせていただきました。ありがとうございました。(Y)

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付

「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

《正誤》表

第 135 号

- ①4P(5/9)右下から8行目 その夢をなす→その要をなす
- ②4P左 12 行目 反対をとうした→反対した
- ③4P左(5/3)3行目 憲法改憲→憲法改悪
- ④5P(5/20)左2行目 司法攻撃→「司法改革」
- ⑤5P(5/29)右4行目 知らず→知らず
- ⑥7P右6行目 雨季のもまた→雨季もまた
- ⑦8P右下から3行目 「非政治家」→「非政治化」
- ⑧9P右下から1行目 移住→居住
- ⑨9P(10/27)右上から9行目 始めて→初めて
- ⑩10P左上から3行目 テロ報復→「テロ」報復
- ⑪11P左8行目 ヨツバウンランセリバヒエンソウ
→ヨツバウンラン、セリバヒエンソウ
- ⑫14P(8/11)右下から10行目 「生長の家」その「生長の～
→「生長の家」。その「生長の～
- ⑬17P左上から17行目 文言に→文案に
- ⑭10P右8行目 「階級制」→「階級性」
- ⑮11P(7/11)左7行目 共同→共感
- ⑯12P(7/16)左11行目 に対する→(削徐)
- ⑰13P(7/21)6行目 ジャウラー→ジャウラーニ
- ⑱13P右7行目 後期→任期
- ⑲15P右下から12行目 著者と→(削徐)
- ⑳16P右13行目 ～本です。み→～本です。
- 217P右6行～7行目 →「す。かつて憲法を楯」(挿入)
- 227P右17行目 手口が→手口を
- 2320P左2行目 隣席→臨席